

礼拝：2021年8月15日 聖霊降臨節第13主日

交読：交読詩編133編

聖書：詩編128編1～6節

マタイによる福音書12章43～50節

説教：「住むべき方を迎える」柳澤 宗光

主イエスが、「会堂にお入りになった(マタ12:9)。」ことを9節は、知らせています。ユダヤ人の会堂には、礼拝のために集まったのでしょうか。そこには、律法学者も、ファリサイ派の人々もいます。人々は、主イエスを訴えようとして、待ち構えています(マタ12:10)。質問が飛びます。「安息日に病気を治すのは、律法で許されていますか(マタ12:10)。」7節で、主イエスは、すでに、お答えになっています。「もし、『わたくしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』という言葉の意味を知っていれば、あなたたちは罪もない人をとがめなかったであろう(マタ12:7)。」さらに、主イエスは言われます。「安息日に善いことをするのは許されている(マタ12:12)。」そして、その場にいた、片手の萎えた人をも、主イエスは、癒やされたのです(マタ12:13)。「安息日には何もしてはならない」という律法を、彼らの目の前で、否定したのです。主イエスは、律法それ自体を否定してはいません。しかし、主イエスは、律法には、神の愛が必要なことを説いているのです。神の愛を忘れ、愛の抜け落ちた律法に固執するファリサイ派。ファリサイ派の人々は、主イエスにより、律法主義の誤りを指摘されたのです。14節には、次の様に書き記されています。「ファリサイ派の人々は、出て行き、どのようにしてイエスを殺そうかと相談した(マタ12:14)。」。会堂の外に出たファリサイ派の人々が、殺意の感情を、顕わにしたことが、14節に、明らかにされているのです。

今朝の御言葉は、こうした、「安息日の癒しの物語」の最後に、46節から、「霊の家族」について、語られているのです。「わたしたちの心に宿る霊」、そして、「霊の家族」について語られているのです。

43節から、行き先の定まらない「汚れた霊」の譬え話が始まります。「汚れた霊は、人から出て行くと、砂漠をうろつき、休む場所を探すが、見つからない。それで『出て来た我が家に戻ろう』と言う。戻ってみると、空き家になっており、掃除をして、整えられていた。そこで、出かけて行き、自分より悪い他の七つの霊と一緒に連れて来て、中に入り込んで、住み着く(マタ12:43-45)。」。その人の「霊」の状態は、以前よりも更に、悪くなるのです。これは、単純な譬え話であり、簡単に理解出来る様な話です。この譬え話は、聖書学者の推測によると、主イエスの創作したものではないようです。この譬え話は、人々の間で、古くから、語り伝えられてきたものと言われています。ここには、悪霊の働きについて、おもしろ、おかしく語られています。しかし、今、この「汚れた霊」の譬え話を、主イエスは、律法学者、ファリサイ派の人々に向かって、話されているので

す。律法学者、ファリサイ派の人々の〔心の中〕を、この譬え話の中に、なぞらえているのです。人々の〔心の中〕、その家に、悪霊が「戻ってきた家」、「入り込んできた家」。その家は、掃除がしてあって、綺麗だったと言っています。決して、彼らの心の中は汚くはありません。少なくとも、彼ら、律法学者、ファリサイ派の人々は、心の中を、一所懸命になって、綺麗にしてきた人々です。それこそ、心の中に、悪霊の入り込む余地なんか無い程に、綺麗にしてきました。ですから、彼ら自身、悪霊には、全く関係ないと思っていたはずです。「わたしたちこそ、清い人間だ」。律法学者、ファリサイ派の人々は、皆、当然のように、思っていたことでしょう。特に律法学者は、悪霊をどの様に退けるか、そして、一度、綺麗になった心は、どの様にして守るか、それには、律法をどの様に、守ったら良いか、と教えていたのです。どの様に、「心の純潔を守るのか」と言うことを、人々に教え歩いてははずです。ですから、自分自身に、「自分は、いかに信仰深く」、「いかに心が綺麗な者」だと、自ら言い聞かせ、自信を持っていたのです。彼らは、彼ら自身の心は、信仰深く、清い者であるという「誇り」で、満たされています。「誇り」で、彼らの心は、「飾り立て」られていました。

43節から語られている悪霊の譬え話。ここで語られているのは、その「掃除がしてあり」、「純潔で美しい心」、「飾り立てられている心」こそが、「悪霊の住み家」となるのだということです。「汝、すべからず」という律法により頼む教えは、悪い習慣や悪い行動を禁じる事により、心の掃除はされます。しかし、掃除された心こそが、「空き家」になっており、「悪霊が住み着く」と、45節は語るのです。「そこで、出かけて行き、自分よりも悪いほかの七つの霊と一緒に連れてきて、中に入り込んで、住み着く、そうすると、その人の後の状態は前より悪くなる。この悪い時代の者たちもそのようになろう(マタ12:45)。」。「この悪い時代」とは、39節で、「よこしまで神に背いた時代(マタ12:39)」と言われています。神に背き、自分たちが、自分たちの心の中に、〔神を受け入れ様としない時代〕です。神を受け入れず、「神に背く心」、それが、最も罪を犯しやすい心の状態なのです。〔神を迎え入れる家〕ではなくて、〔悪霊に入り込まれる家〕。そのことを、譬え話は教えています。このことは、教会に集まる、わたしたちこそ、気をつけなくてはならないと、忠告されているのです。

ここで、なぜ、「心を飾り立てる」事が、問題なのでしょう。私たちは、「心を飾り立てる」ことで、心は満杯になってしまいます。私たちが、「心を飾り立てる」時、心には、神を受け入れる余裕などありません。「自分の思い」が、「自分の心」に、溢れているからです。「自分の心」には、神の思いを受け入れる余裕がありません。結果として、「神に背く心」の状態なのです。

43節には、「汚れた霊」は、追い出されたが、滅ぼされることはなかったことが、語られています。悪霊は、絶えず反撃の機会を狙っているのです。「掃除された心」。そこには、悪霊が入り込む余地があるということです。綺麗に整えられ、そこに悪霊が、気持ちよく住む場所にしてしまっているのです。掃除された心の中は、空き家だったということです。心の中には、誰かが住むべきだったのです。「わたしが住んでいるではない

か」。そう、言われるかもしれません。たしかに、自分が、自分の心の中に住んでいる。しかし、主イエスは、それでは、真に、「住むべき者を迎える心」になっていないと、言われるのです。空っぽなままで、自分自身を「飾り立て」ながら、私たちは、誇りに満ちています。「わたしの方が、信仰歴が長い」とか、「わたしの方が信仰が深い」とか、誇りに満ちています。ファリサイ派の人々は、まさしく、自分たちこそが、信仰においては、一番だと誇っていたのです。そういう誇りに満ちている姿こそが、自分が自分の「心を飾り立てている」印に他なりません。これはまさしく、他人を顧みて言うことは出来ないことです。私たちは、みんな同じ罪を犯すのです。私たちは、どこかで、「心を飾り立てている」のです。その証拠に、自分の、その心の中に踏み込むようなことを、だれかから、一人でも言われた時のことを思って見てください。ファリサイ派の人々が、そういう意味で、誇りを傷つけられた事を忘れてはならないのです。14節で、ファリサイ派の人々は、なぜあれほどに、主イエスを死にまで追いやりようとしたのでしょうか。彼らの心が綺麗だったからです。自分たちの心の中には、すでに「真に住むべき者が住んでいる」と確信していたからです。彼らの心の中には、律法主義が住み着いています。それが、彼らの決定的な弱点だったのです。主イエスは、彼らの誤った律法解釈(マタ5:17)を、正そうとされたのです。「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためではなく、完成するためである(マタ5:17)」。ファリサイ派の律法解釈は、人のための律法であり、神のものではないのです。愛が抜け落ちているのです。その急所に、主イエスが触られた時に、主イエスを、殺さなければ自分達の存在は成り立たないと思ひ込んだのです。

ここで、ファリサイ派の人々とは、遠くにいた過去の人々ではありません。今、私たちは、近い所にいるのです。ですから、御言葉は、常に、ファリサイ派の心を持ってはならないと、私たちに警告を発しているのです。

28節で、主イエスは、語ります。「わたしが神の霊で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたたちのところに来ているのだ(マタ12:28)」。私たちは、すでに、神の国の到来を告げられているのです。〔イエス・キリストの到来とその後の活動〕は、この時代を支配する〔悪霊の追放〕であり、〔神の国到来〕の現実なのです(マタ12:28)。主イエス・キリストの存在と活動によって、〔汚れた霊〕が放逐された時、私たちの〔悔い改め〕と〔神への従順の決意〕が、〔神の国の到来〕を約束されています。しかし、〔悔い改め〕が、単に点に過ぎない時、人は、再び過去の反復を繰り返し、未来は過去に飲み込まれてしまうのです。それが「よこしまな今の時代(マタ12:39)」の命運であると、主イエスは指摘されます。主イエスは「よこしまな今の時代」にあっても、〔悔い改め〕の最後通牒を発することによって、深くこの世を愛し、徹底的に私たちに招いて下さっているのです。〔悔い改め〕は、過去を絶って、新たな歩みを始めるのでなければなりません。〔悔い改め〕は、〔悪霊の住居〕を破壊されようとする神の恩寵に対する、私たちの服従の決意です。それは、再び〔悪霊の住居〕になることへの拒否の決意です。そして、同時に、神の自由な〔恩寵の住居〕、〔福音の住居〕

として生きて行くことへの決意なのです。

人間としてのイエスの生涯に起こった最大の悲しみは、肉親から理解されなかったことです。「兄弟たちもイエスを信じていなかった(ヨハ7:5)」。公生涯を始めようとするイエスを身内の者達は、気が狂った(マコ3:21)と思って引き止めています。イエス・キリストに従おうと決心する者が、家族から誤解されることは珍しくない事です。28節で、「神の国はすでにあなたたちのところに来ているのだ(マタ12:28)」と、主イエスは言われました。「神の国がもう来ている。神の支配が、もうここに始まっている。ここに既に起こっている」。その神のみ業、主イエスがなさっているそのみ業、主イエスの身内の者たちには、関係が無かったのです。それを理解出来なかったのです。ルカによる福音書11章27節で、汚れた霊が戻ってくるとの忠告(ルカ11:26)に続けて、一人の女が群衆の中から、イエスの母への祝福を声高らかに言います。「何と幸いなことでしょう、あなたを宿した胎、あなたが吸った乳房は(ルカ11:27)」。「しかし、イエスは言われた。『むしろ幸いなのは神の言葉を聞き、それを守る人である(ルカ11:28)』」。

19章29節で、主イエスは言われます。「わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子供、畑を捨てた者は皆、その百倍もの報いを受け、永遠の命を受け継ぐ(マタ19:29)」。このことが本当に分かった者は、改めて、〔隣人〕の中に「兄弟・姉妹・父・母」を発見し、〔肉の兄弟・姉妹・父・母〕の中に〔隣人〕を発見する人となるのです。本当の意味の親族とは、必ずしも血族関係によるものではないのです。確かに、血族関係は、絶つことが出来ない絆であり、多くの人たちが家族の中に喜びと平和を見いだしていることは事実です。

私たちの心の中に、本当に〔住むべき方を迎え入れ〕入れなければ、愛をもって赦し合うことなど出来ないのです。今、わたしたちには、心の中に、真に〔住むべき方を迎え入れる〕ことが求められているのです。

お祈りします。主なる私たちの神さま。御名を賛美出来る恵みに感謝致します。今日、8月15日は、あなたが御旨を示された日です。平和の教えに背き、私たちは、あなたに与えられた〔聖霊の宮〕を、〔悪魔の住居〕とする過ちをして来ました。私たち一人一人にとって、過去の過ちから、〔訣別の日〕として、忘却する事がないように戒めて下さい。この願いと祈り、主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン

讚美：讚美歌451

献金

主の祈り

黙禱